

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

－水俣におけるフィールドワークの実践－

(5年計画の4年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士夫・篠塚 明彦
丸浜 昭・宮崎 大輔・宮崎 章
吉田 俊弘

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

—水俣におけるフィールドワークの実践—
(5年計画の4年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士夫・篠塚 明彦
丸浜 昭・宮崎 大輔・宮崎 章
吉田 俊弘

要約

4年前から始まった第二次スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の研究テーマとして、社会科では第一次に継続する「科学者の社会的責任を考える」を掲げた。また、プロジェクト研究においても『科学者の社会的責任を考える』授業づくり」を掲げた。昨年、一昨年は広島で実習を行い、原爆の学習を通して科学者の社会的責任を考えた。今年は新たに水俣で実習を行った。実習を行ったのは、高校2年生のゼミナールである。本報告はその実習の記録である。

キーワード：フィールドワーク 科学者の社会的責任 水俣 水俣病 社会科学習 ゼミナール

1 はじめに

「科学者の社会的責任」を考える実習地として最適な場所はどこかと考えた時に、国内で想定されたのは広島と水俣であった。これまでの2年間の広島実習では、大きな成果をあげることができた。今年度は、フィールドワークづくりの最終段階として、水俣で実習を行うこととした。本論では実習にむけての準備などもふくめて、ゼミナール「水俣から日本を考える」の報告をおこなう。

2 高2ゼミナール

「水俣から日本を考える」

(大野 新)

2.1 中学校における水俣の学習

本校では中学校1年時に、地理的分野で水俣を学習している。4～5時間で学ぶ内容は以下のようなものである。

(1) 水俣病の発見

まず水俣がどのような場所にあるのかを確認する。不知火海（内海）に面していることや鹿児島県の県境に近いことをみる。つぎにチッソがどのようにこの地で操業をはじめたのかをみる。第二次世界大戦前は、朝鮮半島で操業して巨大な企業となっていたことにもふれる。戦後水俣にもどり、アセトアルデヒドを製造

する過程で有機水銀を排水中に垂れ流していたため、水俣病が発生した。最初はネコに異変が生じたが、やがて人体への影響が出る。そして多くの患者が見つかるようになった。

(2) 水俣病への対応

水俣病が見つかったことによって、原因の究明と患者への対応が求められた。原因の究明に関しては、さまざまな説が流されたが、熊本大学医学部の地道な研究によって、チッソの排水が原因だとわかる。しかし、チッソや国はそれを認めようとしなかった。また患者への対応として、1959年12月30日に見舞金契約が提示される。授業ではこの内容をふりかえり、当時の企業や国の公害への対応とその問題点をとらえる。合わせて、認定と未認定という病気の線引きをめぐる問題も取り上げる。

(3) 水俣病と裁判

国が公式に水俣病を公害病と認定して以降は裁判が続き、さまざまな補償交渉が続けられる。その状況と、1996年の和解成立、その後の関西訴訟、現在の裁判、分社化など、おもに歴史的な流れをふまえてその後の状況を追う。

(4) チッソと水俣のその後

原因企業であるチッソは現在どのようなようになったかを資料を使いながら説明する。現在、液晶素材の生産など化学工業の分野では世界有数の企業に成長していることや、われわれの生活と深く結びついた製品を作っ

Discussing the social responsibility of the scientists in the classroom what was Minamata, and how should we teach it?

ていることも指摘する。また、水俣市がどのように変容したのかについては、地図を使って、湾内の埋め立ての問題や環境都市への対応について取り上げる。

(5) 映像から水俣病を知る

水俣フォーラムが作成したVTR「水俣病Q&A」を用いて、視覚的に水俣病に迫る。

以上のような内容で水俣を学んでいる。受験を経た生徒たちは、四大公害とその発生場所、原因企業、原因物質などについて詳しい知識をもっている。しかし、その現場で実際に何が起り、何が問題となったのかについて具体的なイメージはほとんど持っていない。最近、歴史上の一コマとして水俣をとらえている。多くの課題が現在も続いていることや、世界にも大きな影響を与えていることを伝えることで、水俣への関心を引き起こしている。

2.2 ゼミの実施概要

本校の高校2年生を対象としたゼミナールは、土曜日を使い、6月以降年間7回設定されており、1回について3～4時間が使える。年度当初に生徒に対して示したこのゼミのねらいは以下のようなものである。

「水俣病」は戦後日本が起こした公害病の一つであり、現在もおお、さまざまな問題が続いている。それは単に一企業が起こした公害病の範疇を超えて、世界的な影響力をもつものとなっている。さらに、現代世界のキーワードである「持続的な発展が可能な社会」を考える好素材でもある。今回の講座では、まず、水俣病を総合的にとらえるとともに、夏休みを利用してフィールドワークを実施する。フィールドワークでは、水俣を訪問するとともに、水俣病の当事者からの聴き取りや現在の水俣の状況について学ぶ機会としたい。水俣は現在、どのような地域となっているのか、水俣病の患者さんたちはどのような生き方を迫られたのかなどさまざまなテーマが考えられる。本講座を希望する者は、まず地域に対する興味・関心や社会に対する複眼的な視点をもってほしいと考えている。

その説明を受けて、今年度は15名が選択した。水俣での実習を考えた時、まず中学1年時の学習の内容をどのくらいベースにできるかを考えた。しかし、実際に生徒から話をきくと、何らかの関心をもって選択はしたが、中学校の時、学習した具体的な知識はあまり残っていなかった。したがって、水俣に関する学習から再びはじめることにした。

以下、全7回の授業について概要を述べる

1) ガイダンス・水俣に関する総合的学習(1)

〈6月12日〉

本ゼミナールの概要を説明し、各受講者からの講座選択の動機を聞いた。

水俣病に関する学習としては、2冊のテキストを準備した。①水俣学ブックレット No.6『水俣病小史』②スーパーサイエンスハイスクール 総合講座講演記録集 ①は熊本学園大学の水俣学ブックレットの一冊である。水俣病の歴史がまとめられている。②は本校で行っているSSH(スーパーサイエンスハイスクール)事業の一環として実施した講演会の記録である。故宇井純先生に「科学者の社会的責任」をテーマに本校で講演していただいた時の講演録である。先生の科学者としての活動の中に水俣病が大きく関わっているので、その部分を取り上げた。生徒にはこれらを読んでも、かつて学んだことや現在の水俣の状況を思い起こさせるようにした。加えて高校から入学した生徒も選択者にいたので、基本的なことがらを説明した。文献としては、そのほか『証言・水俣病』栗原彬著も紹介した。

合わせて、5月10日に放送されたNNNドキュメント'10「未来への診断書 水俣病と原田正純の50年」を視聴した。水俣病の研究で名高い原田正純氏を追ったドキュメンタリーである。水俣病の過去から現在までがよくまとまっているので、参考にした。また、科学者としての原田正純氏に着目してほしいという意図もあった。なお、映像としては、同じころ放映されたE TV特集「水俣病と生きる～医者原田正純の50年～」もすぐれているので参考にした。

2) 水俣に関する総合的学習(2) 〈6月22日〉

2回目も1回目の続きと、夏の実習の計画づくりを行った。前半で『水俣病小史』のまとめを行い、後半は実習の計画づくりをした。実習では、水俣市内で多くの方々から聴き取りをする予定だったので、訪問先や質問項目、交渉などいろいろな準備が必要となる。生徒は班に分かれて、準備を進めた。また、実習初日に熊本学園大学の宮北隆志先生にお話をうかがうことが決まったので、先生の著書もテキストに追加した。報告書は以前から熊本学園大学で開かれている水俣病に関心があり、水俣病を学問としてどのようにとらえるかという観点からお話をうかがうことを意図したからである。水俣学ブックレット No.8『失敗の教訓を活かす』を参考にした。

3) 実習準備 〈7月中旬〉

8月のフィールドワークにむけて、準備を行った。

今回の実習のコーディネートをお願いした環不知火プランニングにもアドバイスをもらいながら、交渉を進めていった。中学校からの生徒は中2・3でフィールドワークを行っているので、実務的な面での不安は少なかった。しかし、具体的にどのようなところを訪問するかについてはなかなかアイデアが出なかった。そのため、現地コーディネーターに多くの訪問先を紹介してもらうこととなった。

4) フィールドワーク〈8月25日～28日〉

後述

5) 水俣・明治大学展での発表〈9月4日〉

今年は、9月初旬に明治大学で水俣展が開かれた。水俣展は1996年の東京展以来、全国各地で開催されているもので、水俣病に関する総合的な展示・学習の場である。今回の水俣展では、ホールプログラムとして、教育シンポジウムが企画された。テーマとして、「水俣を歩いて学ぶ」があがり、水俣でフィールドワークを行っている学校の実践交流の場とすることになった。報告者がコーディネーターをつとめたので、本校を含む3つの学校が発表を行い、そのあと意見交換を行った。生徒は実習直後の発表であわただしかったが、新しい経験をつむことができたようだ。なお、この内容については機会をあらためて報告したい。

6～8) 水俣実習報告(1)(2)(3)〈9月11日、10月16日、11月20日〉

水俣・明治大学展をふくめ、夏の実習の報告を担当ごとに行っていた。最終的には報告書にまとめるという目標があったので、出されたまとめを一つずつ検討していった。ゼミは1カ月に1回しかないため、なかなか各自の報告や意見のまとめを作りにくい状況がある。このため、メーリングリストやネット上のスカイドライブなどを使って、報告の原稿にいつでもアクセスしたり、連絡が行えるようにした

9・10) 個人研究構想発表〈1月22日、2月12日〉

現時点ではまだ実施していないが、ゼミナールのまとめおよび、来年度の卒業研究の準備として、個人研究構想の発表を2回にわたって行う予定である。

3 水俣実習報告(大野 新・篠塚明彦)

3.1 実習の概要

日程：2010年8月25日(水)～8月28日(土)

行き先：熊本県水俣市および鹿児島県出水市

引率教員：大野 新・篠塚明彦

参加生徒：高校2年生14名(1名欠席)

引率2名

3.2 おもな行程

- 1日目 午前 熊本空港経由水俣入り
午後 熊本学園大学宮北隆志先生による水俣学講座
- 2日目 午前 親水護岸、百間排水口見学
水俣病資料館見学
午後 班別フィールドワーク(1)
水俣市民に聴く(班行動)
①水俣病患者の方々3名
②水俣市民(市役所、市議など)
- 3日目 午前 班別フィールドワーク(2)
ほっとはうす、相思社、
熊本学園大学萩原先生
午後 チッソ水俣工場、国水研
夕方 出水市上場地区へ移動
農家訪問
- 4日目 午前 出水市内でワークショップ
午後 熊本空港経由空路帰京

3.3 生徒が記録した実習報告

上述したように実習が行われ、生徒たちはさまざまな経験を積むことができた。生徒の報告書をもとに、おもな訪問先とそこでの聴き取り内容を紹介する。

1日目 午後

1) 水俣学講座 宮北隆志先生

於：熊本学園大学 水俣現地研修センター
宮北隆志先生・・・京都大学大学院工学研究科修士課程(衛生工学専攻)修了、熊本大学医学部衛生学講座講師を経て現在、熊本学園大学社会福祉学部福祉環境学科教授

1. 水俣病事件

水俣病事件の問題点とは、同じ地域に住み、同じように魚を食べて暮らしていた者が、政府のその場しのぎの対策によって、さまざまに分断されているということである。現在の課題としては、水俣病事件の全容解明、被害補償と保健・医療・福祉対策、水俣湾・不知火海の継続的モニタリングなどがある。

2. 環境首都をめざす取り組み

1. 石けん工場

台所から流してしまえば川や海の汚染源となる廃食油を原料に石けんを作り、もう一つの汚染源である合成洗剤の使用をやめ、石けんによる環境の街づくりを進めることが目的。自然の営みと循環可能な

暮らし、そしてそのことを裏付ける技術を取り戻そうとしている。

2. 環境マイスター

環境マイスターとは環境に配慮したものづくりを行っている認定された人々のこと。その認定内容は多岐にわたり、イリコづくり・茶づくり・竹箆づくり・野菜作り・石けんづくりなどが挙げられる。

3. ごみの22分別（2010年からは23分別）

住民の負担を減らしつつ資源を最大限に活かすということが目標であり、市内に約300か所存在するリサイクルステーションでは、月に1回住民が集まって資源ごみの分別が行われ、それが地区のコミュニケーションになっている。また、市内の中学生は月に1回ごみの収集を手伝うことになっている。このように先進的なごみの分別を行っている水俣市であるが、ごみ分別のモデル都市となるためには課題もある。それは、水俣の人口が約2万7千人と少なく大都市の参考となりえないということだ。ただし宮北先生の考えとしては、大都市を地区単位で考えてみれば十分モデル都市となり得るとのこと。またゴミの総量に関しては現在よりも減らす必要があり、そのためにはもう一つ上の段階に進むことが必要になってきている。そのもう一つ上の段階として考えられるのがリデュースである。

4. リユースびん（Rびん）

リユースびんはビンを壊して溶かしてリサイクルするという一般の方法とは異なり、洗浄されてそのまま再び使われる。リサイクルの上を行くリユースの例である。

5. 村まるごと博物館

村の全世帯の同意によって初めて発効される地区環境協定の締結により村丸ごと生活博物館となる。地域の資源を最大限に生かした村づくりを目指している。生活博物館に取り組んだことにより集落にはよそから人が来るようになり、村が活気づいてきている。

6. ほかにもびんの風・海藻の森プロジェクト・アマモの再生プロジェクトなどがある。

3. 水俣が抱える廃棄物処分場

1. 水俣湾堆積汚泥処理事業

水俣湾に堆積した水銀ヘドロのうち水銀濃度が25ppm以上のものについて、熊本県が14年の歳月と485億円という巨額の費用をかけて埋立工事をおこない、その埋立地にエコパークをつくった。しかしその際にドラム缶に詰められたヘドロは現在も埋立

地の下に眠っており、耐久性の面からみると有害なヘドロが流れ出るとは十分にありうる。

2. 八幡残渣プール

カーバイトという有害物質が染み出て一部の土が白くなっているが、水銀は含まれていないということで放置されている。

3. チッソによる百間排水路のダイオキシン汚染除去

7～8年前に発覚し市民はダイオキシンの完全無害化を望んでいたが、結局は県の公害防止事業としてチッソが6割、国と県が4割を出資して別の土地に埋めることになった。

4. 熊本学園大学水俣学研究センターについて

水俣学研究センター3つのプロジェクトを軸に活動している。

プロジェクト1：水俣病被害の現状と再評価に関する健康・社会問題の調査研究

健康被害の側面だけではなく、生活面や地域社会の疲弊、地元経済への影響なども視野に入れ総合的に研究していく。

プロジェクト2：水俣学関連資料の収集およびデータベース化と世界的発信

水俣病事件の全体像を解明し、その経験を有効に生かすために、関連資料を収集・整理し、世界に発信する。水俣学ブックレットや水俣学講義などの出版物の発刊や、環境被害に関する国際フォーラムへの出席などを行っている。

プロジェクト3：水俣・芦北地域における地域再生モデルの構築

地元の様々な関係者（行政・企業・被害者団体・地域経済団体・市民/NPO・チッソ労働者・農漁民など）の協働により地域再生の方向性を探り、戦略的な政策提言が可能なプラットフォーム（以下PF）の構築を目指す。今回のお話ではこのプロジェクトに重点を置いてお話をさせていただいた。

a. 水俣・芦北地域戦略PFに至るまでの取り組み

- ・水俣市執行部への趣旨説明と提案
- ・水俣での市民向け公開講座の開催
- ・さまざまな個別プロジェクトへの関わり

b. 水俣・芦北地域戦略PFの発足（2006年5月）

熊本学園大学水俣学現地研究センターは知的資源・施設・人的資源を生かして参画者間の潤滑油としての役割を担う。めざすものとしては持続可能な水俣・芦北地域の実現や、新たな公共空間の創造などがある。その新たな公共空間とは多様な個人・NPO・関連機関の参画・協働による地域の運営のこと

であり、2009年5月からは5つの円卓会議からなる環境モデル都市推進委員会が設置され、熊本学園大学水俣学研究センターと水俣市役所と協働することによって実際に新たな公共空間を創造している。ちなみに協働とは、生きた情報を互いに共有し、継続的な対話による新たな価値を発見し、目的を共有した実践の中で、自発性を基にしたつながりを作り、市民・民間事業者・行政の新たな関係性を作り上げるプロセスをいう。地域戦略の提案までの道筋は、ヒアリング・情報収集⇒課題検討会（月1）⇒公開討論会/フォーラム⇒地域戦略の提案/アクションプランの策定⇒円卓会議の設置というふうになっている。

5. まとめ

「水俣」について学んだり話を聞いたりする場合、大抵は水俣病の発生から現在までの闘争の過程に焦点をあてることが多いが、宮北先生のお話は現在の水俣についてということに興味深かった。ただ、話の大部分は先生の著書『水俣学ブックレット NO.8 失敗の教訓を活かす』に書いてあることであつたので、それ以外の話を伺うことができたならより一層有意義だったように思う。

（まとめ：田中）



2日目午前

2) 親水護岸・水俣病資料館

2日目の午前中に吉永さんらガイド2人の方に案内していただいた親水護岸、水俣病資料館、百間排水口の三か所についてまとめてみた。

まず始めに水俣駅で自電車を借り、エコパーク水俣まで自転車で移動。その後、徒歩で親水護岸に行った。

1. 親水護岸

a. 地形

水俣市に面した水俣湾は陸地に囲まれているため海流の影響を受けにくい比較的穏やかな海であり、漁師の漁の場であるのはもちろんのこと、プールの代わりに水練の場としても用いられる、まさに地元に密着したものだった（そのため学校にはプールがなかったらしい）。しかし、そのような地形であるが故にチッソの工場から排出された有機水銀がほとんど外部の海に流れ出ることなく溜まってしまい、水俣病と言われるような集団水銀汚染が始まった。

b. 水俣病

1932年頃から流され始めた工場排水によって水俣湾にヘドロがたまり、普段水俣湾を漁場として使っていた漁師はもちろん、漁師が持ってきた魚を食べた水俣の人達も次々と水俣病を発症していった。また、水俣病被害が公のものとなってからは水俣湾で泳ぐことも出来なくなり、学校にプールがなかった水俣の子供達の中には「結局子供の時に一度も泳げなかったので全く泳げない」世代も生まれてしまったらしい。

c. 水俣湾の埋め立て

1974年、第三水俣病問題により風評被害を受けた県は、汚染された魚を湾内に閉じ込めるために仕切り網を設置、県の魚の安全性をアピールした。その後県は公害防止事業としてドラム缶に詰められた魚487トンと水銀ヘドロ151万 m^3 と共に水俣湾の一部58.2haを埋め立て、親水護岸が造られた。しかし、この埋め立て地はヘドロを合成繊維のシートやシラス、そして採石場の1mの山土で覆った非常に簡易的なもので、腐食等で地上にヘドロが漏れ出す可能性が十分あるという深刻な問題を抱えている。

d. 現在の親水護岸

こうした産業廃棄物が埋められた水俣湾埋め立て地には現在エコパーク水俣、水俣病資料館、研究センター、竹林園が造られている。また埋立地の親水護岸には水俣病患者の慰霊碑があり、毎年追悼式が行われている。しかし原爆慰霊碑等とは違い、差別や偏見を恐れて慰霊碑に名前を刻まない人もいるなど、この慰霊碑からも水俣病が特別な事件であったことが伺える。

2. 国立水俣病研究センター・水俣病資料館

まずは水俣病研究センターにて毛髪検査を行った。後日の結果からも分かる通り、水銀汚染は水俣に限ったことではなく、現在の我々にも影響していることなのである。毛髪検査の後は研究センター内を見学した。水俣病が流行った当時の漁師の家が食べていた料理や重さを知るため実際の水銀が展示されていた。また、ヘドロや汚染魚が除去された今の水俣湾の海中を見せ

ていただき、問題は残っているが、主観的に見て水俣の海がほぼ完全に回復していることに驚いた。

見学後は研究センター内の連絡口を通り、水俣病資料館に移動した。その後、資料館の中を案内されたが、事前学習と範囲がかぶっていた部分が多かったので（詳しくはガイドブック「水俣病小史」を参考）、今回は資料館を案内されて初めて知った興味深かったことをいくつか挙げる。

e. 現在のチッソ

水俣病発覚前は化学部門で発達していたチッソも今では社名をめったに聞くものではないが、現在テレビやパソコンの液晶、写真フィルム、塗料など数多くの生活必需品を製造しており、特に液晶部門においてはドイツの会社と世界のトップシェアを争うほどである。しかし大企業に再び躍進したチッソが未だに県債で慰謝料を払っていることには疑問が残る。

f. “宝子さん”

この“宝子さん”という方は不幸にも胎児性患者として生まれてしまったが、その結果幸いにも母親や兄弟達は水俣病患者にならなくて済み、“宝子さん”の家族は一家全員の水俣病を一手に引き受けてくれた“宝子”であるとして、この方が22才で亡くなるまでずっと大切に育てた、というお話。胎児性患者が生まれてしまったことをマイナスに考えてしまう家庭が多かった一方で、こうしたものの考え方が出来る家庭がいたことにとても驚いた。

g. 第二水俣病

新潟で水銀汚染が起きた時、水俣市での水銀汚染の状況を受けて新潟県内で胎児性患者が生まれないように汚染地域の妊婦に中絶を勧め、結果的には水俣市程騒ぎが起きなかった。この“中絶させる”という行政の対応が、後に行われた第二水俣病の裁判において大きな争点となった。

資料館を見学した後は自転車を駐輪したエコパークに戻り、自転車で百間排水口へ向かった。百間排水口は吉永さん一人でのガイドとなった。

3. 百間排水口

百間排水口は昭和7～43年までチッソ水俣工場のアセトアルデヒド製造過程における工場排水の排出口として使用されていた。この百間排水口で水俣湾へと流されていたものが水俣病の原因となったメチル水銀化合物を含む工場排水であり、流された水銀の量は70～150トンあるいはそれ以上と言われ、排水口周辺に堆積した水銀を含むヘドロの厚さは4m以上にな

る所もあったらしい。まさに「水俣病の原点、爆心地」と言えるだろう。また、水俣病が発生する以前から地元の漁師はこの場所を「船底についたフジツボが良くとれる場所」として船を停留していた一方で海の生物に何か悪影響を及ぼすものが垂れ流されていることに薄々気付いていたらしい。現在では浄化された工場排水や生活排水がこの排水口から流れており、水俣湾の魚介類の安全性を確かめる調査も引き続き実施中である。



（親水護岸にあった水俣病患者の慰霊碑。全員で患者の方々の冥福を祈った）

（まとめ：佐宗）

2日目午後

3) 水俣市民に聞く－水俣病患者の方々－

永本賢二さん

1. 基本情報

1959年9月1日に長男として生まれる。その時の家族構成は、祖母、両親、姉二人。

1970年に胎児性の水俣病患者として認定された。現在はほっとはうずに勤務していて、水俣病資料館の「語り部」の一員でもある。

2. 永本さんの経験談

i 小学生の頃

a. 小学生時代に受けたつらい差別

小学生の頃、永本さんは周囲からひどい差別を受けたのだという。例えば、同年代の子ども達から石を投げつけられたり、授業中に足が痙攣を起こしてしまうと、先生に足を叩かれたり、さらには水俣病患者の弟を持つというだけでいじめられる姉を目の当たりにしたり・・・と、挙げればきりが無いといった感じだった。さらに、水俣病患者ということで補償の対象となり、補償金を受け取っていたということもいじめられる一つの要因となったらしい。例え

ば、永本さんが学校に新しい鉛筆を持って行ったりすると、他の生徒から、「補償金でなんでも買えていいねえ」などと言われるといったことが多々あり、補償金を持ち逃げされたという信じられないような出来事もあったらしい。このように激しいいじめ、差別を受けてきた。

b. チッソに対する感情

では当時、水俣病の原因企業であり、学校の校歌にまで影響するほどその存在が大きかったチッソに対してはどのような感情を持っていたのだろうか。これには意外な答えが返ってきた。それでも「チッソを応援していた」のだという。その主因は、永本さんの父親がチッソの社員であったということだ。チッソで働き、漁師もやりながら、一家を支える父の姿を見ていて、チッソ側を応援したくなったのだという。これで少し納得できた気はするが、それでもやはり自分の受けている差別、いじめのそもそもの原因となった企業を応援するといった感情は、僕らには想像し難いことであると思った。まだ小学生で、自分の立場があまり分かっていなかったというのは当然あるだろうが、この永本さんの言葉から、当時のチッソという企業の存在の大きさがうかがえた。

c. 当時の水俣の様子

水俣病の話と直接の関係はないが、当時の水俣の様子も話していただいた。今の水俣はとても静かなところであるが、当時の水俣は今からは想像できないほどの賑わいだったのだという。クレーンなどの重機の稼働音が、夜中もずっと聞こえてきたらしい。永本さんはいじめられて辛かった頃、そのクレーンの音を支えにしていたという話も聞かせてもらった。

ii 中・高～就職

a. チッソに対する気持ちの変化

中・高と進学していても、いじめや差別はあったという。父親がチッソの社員で自分は水俣病患者という複雑な立場のなかで、とても辛かっただろう。そしてその後、それまではチッソ側を応援していた永本さんの心情に変化が生まれてくる。きっかけとなったのは就職したことだ。就職したことで、現在自分の置かれている立場、状況が分かるようになったのだという。そして、それまでのようにチッソ側を応援することはなくなった。さらにその当時の仕事場の環境も嫌になり、退職した。

b. 水俣病を伝える立場となる

水俣病の語り部としてお話をされるようになるの

はその後のことだ。ではなぜ語り部として自分の経験を話していこうと思うようになったのだろうか。それは、当時既に周りいた自分の経験を話している人たちをみて、それに影響を受けたからだという。初めて公の人前で自分の水俣病体験談を行ったのは高校でのことだ。その時は話すのもとても辛くて、大変だったらしいが、当時抱いた決意が原動力となって、今もこうして我々に自分の経験を話して下さっている。

3. 現在の永本さんの考え

水俣病の体験談の他に、それに関連することへの永本さん自身の現在の考えも聞かせていただくことができた。

i 昔と比べて、差別は改善されたか

激しい差別がなくなり、良くなってきたのは最近のことだが、やはり差別は今でもあるらしい。また、水俣病患者の人は働かなくていいという考えをする人もいるらしく、それも良くないと永本さんは言っていた。これらの話に関連して、永本さんは、現在でもこのように差別が残っているので「水俣病は終わっていない」ということを強調していた。まだまだ苦しんでいる人がいる今の水俣を見てほしいのだそうだ。

ii 水俣病への国や県の対応をどう思うか

当然国や県の水俣病への対応に不満などはあると思うが、永本さんは、「今では国や県に支援してもらっているので強くは言えない」と言っていた。それに関連して、国や県意外にももっと多くの人に応援してもらいたいという話もしていただいた。

iii エコパークについて

水俣市にあるエコパークのことを、永本さんは好ましく思っているらしい。なぜなら、このエコパークをつくっていく過程の中で、障害者の人たちが、花を植えたりするのに手伝っているからだ。このような取り組みを、もっと望んでいるとのことだった。

4. まとめ

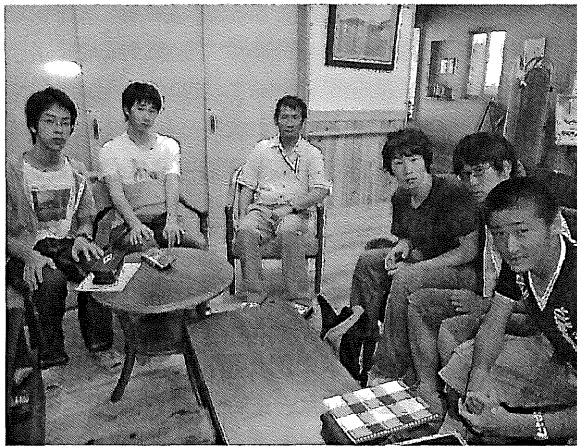
グループごとの別行動での最初の訪問場所ということもあり、訪問前は緊張していた。また、永本さんとコミュニケーションがとれるかなど、若干の不安もあった。しかし実際に話してみると、とても話しやすく、こちらの質問にもしっかりと答えていただけ、安心した。また、昔の話をされるときはとても悲しそうな顔をされていたのが印象的だった。

水俣病の被害者という、水俣病と一番近い距離に生きて、病気以上につらい事も経験してきた方の話す内容には、やはり重みがあった。このような早い段階で、

水俣病の問題を考える上で最も大きな観点とも言える被害者の方の話聞いたのは良かったと思う。第三者的に水俣病を考えようとするにつれて、被害者の苦しみというのが何となく遠い感覚のものになってしまいそうだが、ここで確かに、大きな被害者の苦しみの存在を知らされた。

また、当時の水俣を生きた人の話という意味でもとても価値があり、特に、企業城下町であった水俣で発生した公害の複雑さ、解決の難しさも感じられた。

(まとめ：鎌田)



4) 水俣市民に聴く－水俣市民の方々－

中原泰子市議

水俣市内の小学校に通った後、熊本市内の中学校に通う。その後看護専門学校に入ったのちに看護師となり、36歳からは水俣市議となる。現在1期目。水俣病発生当時に祖父がチッソの重役であった一方で、母の兄弟の中には水俣病を発病した家族がいる。

1. 今なお残る水俣病に対する差別

中原市議は、水俣の小学校に通っていた時には水俣病に対する差別というものを感じなかったが、熊本の中学校に通うようになってからそういった差別を感じるようになり、それ以来出身地が水俣であるということを書いていくようになったとのことだった。最近では、サッカー事件（熊本県の中学校サッカー部同士の練習試合で、他の市の中学校の選手が水俣市の中学校の選手に再三にわたって「水俣病、触るな」などと暴言を吐いたというもの）の後に、不適切な発言をした生徒が通っている学校の保護者・教員ら45名ほどに中原市議が説明をした際に、説明の後の質問で何も聞かれなかったことが差別の一種であると感じた（水俣病について質問してはいけないのだという考えが差別であると感じた）とのことだった。

2. 二つに分裂したままの水俣

水俣市内にも水俣病に対する差別が今なお残っていて、企業城下町としてのチッソというとらえ方をする立場と、水俣病の原因企業としてのチッソというとらえ方をする立場に住民が分かれてしまっている。例を挙げると、勉強会などはそれぞれの立場で別々に行われているし、さらに身近な例でいえば、お祭り一つをとっても住民が二つに分かれてしまっている。中原市議は、公平とされる円卓会議ですら後者の人のほうがより多く参加していて、かたよってしまっているのではないだろうかとおっしゃっていた。これは経済面でも気持ちの面でも非常にデメリットが大きく、市議会としてはまず話し合いの際に両者を混ぜるということを行っていかねばならないだろうとのことだった。

3. 外国における環境問題

水俣病からわかることとしては「利便性があるもの裏には何か大変な思いをしている人がいることがある」ということである。例として、ボリビアではエコカーが動くのに必要なリチウムイオンの採掘の際の廃液で公害が起きているし、中国やアジア諸国では工業化の陰で年間2000tを超える水銀を排出している。これは1932年～1968年でチッソが排出した水銀の量が400tであることを考えるとすさまじい量であることがわかる。これらの水銀は海流によって日本へとたどり着くのであるから、日本にとっても他人事ではない。鳩山首相の時には水銀の危険性を考慮して水俣条約を作ろうという計画があったが今は進展していない。

4. 水俣のすべきこと

何と言ってもまずは住民の分裂が解消されるように努力することであり、これなしには水俣の発展は望めないとのこと。このためにはアサーティブコミュニケーション（自分の意見を円滑に伝えるためのスキル。発祥は1960年代の米国といわれ、有色民族や女性など社会的弱者とみなされていた人たちによって発展した。）を参考にするとよいかもしれず、また、水俣病の調査を世界に広げたり、新エネルギーの開発をするなどといったことも重要であるとのこと。

5. まとめ

中原市議は議員1期目ということもあってか、市議としてというよりは一市民としてのお話をして下さったように思う。現在の水俣市民が二つに分かれていることなど、正に水俣市民でなければわからないことを教えていただけて興味深かった。ただ、中原市議が考えていらっしゃる「差別」の定義（サッカー事件後の説明の件）は僕には理解できなかった。それが自分と

現場との感覚の差であるのか、それとも個人的な感覚の差であるのかはよくわからないが、その感覚のズレが今でも理解できず何とも歯がゆい。

(まとめ：田中)

3日目午前

5) 相思社

相思社とは

水俣病患者および関係者の生活全般の問題について相談、解決にあずかるとともに、水俣病に関する調査研究ならびに普及啓発を行うことを目的とする法人。

1. 相思社の理事 遠藤さんのお話

相思社の歴史は大きく二つに分けられる。

前期(1974-1989)…未認定患者運動を全面的にサポート

後期(1990-)…水俣病を記録、伝えていく活動

(i) 前期

1974 相思社開設 一次訴訟の時に裁判で戦った患者さんたちが寄り集まって一服できる場所として、そして時には協力して作業しようということを目的として設立された。

しかし、連日のチッソとの抗争、裁判などで患者団に休む暇はなかった。→患者運動の活動の基地としての機能を果たすようになった。

また、相思社には運動を続けていくための費用が十分になくなってきた。→稼ぐことが必要！

・ミミズの養殖

化学肥料を使わずに豊かな土壌を作る。

・キノコの栽培 (1977~)

・甘夏ミカン…有機栽培・無農薬

(∴)水俣は化学物質によって甚大な被害を受けた。だから、化学物質を極力使わないようにしていくことを目的として始めた。

こうして患者さんを支えていく活動を続けてきた。ところが・・・

1989 甘夏事件

有機栽培・無農薬をうたって販売していた「甘夏ミカン」が不作であったため、収穫量を確保するため農薬を使用したミカンを加えて販売していたことを告発された。

→理事の半数が辞職、相思社崩壊の危機

→水俣のために何をしていくのがいいのか？

(ii) 後期

水俣病について正しく伝えていくことが大切！

(∴) 相思社は水俣病に対する関心が高い人が支えている。また博物館に関しても、水俣病問題にかかわってきた人々が主に訪れることが多いという。

→この状況を打破し、もっと多くの人に水俣病を正しく理解してもらいたい

～遠藤さんのエピソード～

ハンセン病患者の人とお食事をする機会があったとき、何気なくご飯をついでもらおうとお願いしたら、「私がついだのでいいですか？」と聞かれ、驚き、同時に悲しかった。

水俣病についても同じような厳しい差別が残っている。今年にもいわゆる「サッカー事件」が起こった。まだまだ水俣病は終わった出来事ではない。被害者は精神的にも大きなダメージを受けている。だから水俣病について正しい理解をしてほしい。

2. 遠藤さんの水俣病事件に関する考え

・見舞金 10万円

これはチッソ側から支払われた見舞金の額である。当時のチッソはまだ責任を認めてはいなかった。当時のお金として見舞金にしては高すぎる！この時点でチッソ側は自分たちに責任があるかもしれないことを認識していたのではないかと。

→そのうえで「見舞金」という形をとったのは許せない！！

・水俣病の特別措置法について

大部分の人は賛成している一方で一部反対している人も(5%くらい)

遠藤さんの意見…「いい法律ではない」

チッソ・国などの責任をうやむやにすることを意図した法律であるように思われる。これは詐害行為であり、違憲ではないか？一企業の救済のための法律は欧米ではありえない。

・遠藤さんの考える患者救済案

チッソは水俣病患者に対して責任を負っていくべき。また手帳は存続していくべき。

※「手帳」…水俣病総合対策医療事業の一環として、交付される医療手帳・健康手帳。水俣病が発生した地域において、水俣病とは認定されないものの、水俣病にもみられる四肢末梢優位の感覚障害を有する方に医療手帳を交付し、また、一定の神経症状を有する方に対し、保健手帳を交付し、医療費(自己負担分)、療養手当(医療手帳のみ)及びはり・きゅう施術費等を支給しています(但し歯科・産婦人科を除く)。

・水俣病をより多くの人に伝えていくべき

水俣病という人間の勝手な開発によって引き起こされた悲劇を、これからの世代にもっと効率的に伝えていかなければならない。

(∴)今水俣病を伝える活動をしている人たちが年輩の方ばかりになってしまい、このままでは水俣病が過去のあつ一つの悲しい出来事としての意味しか持たなくなってしまうから。水俣病は日本人をはじめとして、全人類が忘れてはならない悲劇であり、これは伝え続けられなければならない。

3. 資料館について

水俣病の原因について細かく伝えるよりも、普通に生活していた市民が平和な生活を奪われたということに重点を置いた構成となっている。親水護岸にある資料館に比べ、スペース自体はそれほど広くはないが、当時の生活がとても伝わる博物館だった。とくに当時市民が使っていたものの実物も展示されており、より市民の目線から水俣病を見ることができる。

4. 最後に

遠藤さんはとても親しみやすい人で、いろいろな話を分かりやすく話してくれた。なので、僕たちも聞いていて退屈になる時間などなく、とても勉強になる時間を過ごせた。

また、一次訴訟の時に使われたと思われる「怨」の文字が入った黒い旗を見たときには真夏にもかかわらずぞっとするくらい怖かった。それだけ水俣病患者の怨みがこもっていたに違いない。このレポートを書いている今でも、あの感覚は鮮明に思い出される。それだけ深く印象に残った。午後に訪問したチッソは予想以上に「よい」企業であると感じたが、水俣病に対する責任は今後も永遠に負っていかなければならないと思う。(文責 堂本)



3日目午後

6) チッソ水俣工場

1. 水俣駅～チッソ社内まで

水俣駅からチッソ工場までの道はおよそ50mほどの直線だけだった。ここから水俣におけるチッソの重要性が少し感じ取れた。門をくぐろうとするとすぐに警備員が出てきた。その早さに少し驚き、化学工場というものの秘匿性を意識させられた。その後、今回案内を担当してくれた木戸さんが現れ僕らは入ってすぐの会議室の様なところでまず話を聞いた。

2. 会議室にて

1 木戸さんについて

今回対応してくれた方でチッソでは主に外部への広報などの活動をしている。また父親が後述する患者センターの責任者をやっておりそちらの手伝いなども行っている。今回の旅をプロデュースしてくれた吉永さん(もともと患者側で闘争に参加していたためチッソの幹部から恐れられている)とも知り合いである。

2 ビデオについて

会議室に入ると軽い挨拶のあと企業PR用と思われるビデオを見せられた。あまり水俣病のことは言及しておらず、どちらかというチッソの成り立ちや今のチッソについてのものであった。

3 木戸さんの話

ビデオを見終わるとその中身の説明などを行った後、質疑応答をした。その中身は以下のとおりであった。

a. チッソの歴史

1906年野口遵(したがう)によって鹿児島県に曾木電気(株)として設立された。もともと水力発電を行っていたが1908年にその電力を用いてのカーバイドの製造を水俣市で始め、社名を日本窒素肥料(株)に改称、化学工業へと進出し、以後日本の化学工業の先駆けとして事業を拡大していった。また1950年に新日本窒素肥料(株)として石油化学分野などに進出し、現在は主にこの分野で活躍している。

b. チッソ水俣工場の製品

チッソ水俣工場では液晶などのファインケミカル製品(多品種少量生産で付加価値の高い製品のこと)や化成品、合成樹脂、化学肥料などを作っている。なかでも液晶は世界のシェアの49%をしめており、また四塩化ケイ素は光ファイバーや太陽光発電に使われている今の世の中で注目されて

いる製品の一つである。

c. チッソの社員について

水俣工場にはピーク時には 5000 人の従業員がいたが今は 500 人くらいで関連会社の社員が約 2000 人いる。現在、雇用としては高卒者のほとんど、大卒者も半分くらい地元から採用している。またチッソに採用された社員はどこの工場の人でも全員一度は水俣で研修を行っている。しかし、実質 2 時間ほどしか時間がとられておらず、ひどいと感じた。

d. 市の分裂と地域貢献

水俣病における闘争の影響で今でも前述した吉永さんとチッソの幹部の様に水俣市全体でチッソ側と患者側の間に大きな溝があるらしい。もはや個人間の恨みつらみになってしまっているため、その関係が回復するには時間が必要だと考えている。そのため地域貢献をしようとしても「チッソが支援しているなら参加しない」や、「昔さんごん悪いことしたのに今頃になって地域貢献とか何考えてるの」などといった意見が少なからずあり、今現在表向きにチッソという形での地域貢献は実質行っていない。しかし木戸さん個人はよきこい踊りなどで地域の祭りに参加（貢献？）しているなどといったチッソの社員個人での活動はある。

e. 水俣病患者センター

現在チッソには水俣病患者センターなるものがあり、患者さんがやってきてお話をしたり、患者さんが亡くなったときは事前の承諾をとって香典を送ったりしている。しかし従業員は 2 人でそのうちの一人はパートの方であるため実質 1 人というのが現状である。その理由としては 2 人以上になると認識の違いから話のズレが生まれ厄介なことが起こりかねないからと言っていた。

f. 現在の水俣病の取り扱い

また、チッソでは現在工場排水の処理に自然浄化システムを使い排水処理をしている。このことは結構アピールされておりチッソが水俣病の原因である工場排水を注意して管理していると広めたがっているような気がした。またチッソとしては水俣病の資料の様なものは歴史的なものしか残していない。また今回の様な見学者を受け入れるようになったのもここ 3 年くらいのこと。

g. 分社化について

最近何かと話題になっている水俣病特別措置法によって認められたチッソの補償部門の分社化に

ついてはチッソ側としてはもちろんだが大歓迎である。このメリットとして外国の一部の会社との間で今までは裁判を抱えていることが原因で契約を結べていなかったが分社化を行うことによってそれらの会社との契約が可能になり、会社の経営がよくなり、そのお金を水俣病の補償に回せるというもの。

3. 展示について

木戸さんの話が終わると会議室に併設されたチッソの展示を見せられた。ここには前述したチッソの様々な製品が展示されていた。ここで木戸さんから旭化成や積水ハウスなどはチッソから独立した企業であると聞かされて驚いた。



4. 工場内見学について

工場内は撮影も禁止で遠目から「ここでは何々を作っています」といった説明を受けるくらいでありよくわからなかった。一通り回った後に海の近くにいき「この海を守らなくてはいけない！！」というようなことをいわれそのあと工場をでた。

5. 感想

行った直後は上手く全体がつかめずチッソはやるべきことをやってるのでは？というような感覚を持ったが、後になって冷静に考えると地域貢献なども実質的には行えておらず、水俣病患者への対応に関しても従業員 2 人でチッソに比較的抵抗なく訪れてくれる患者のケアをするだけという非常に空虚なもので、また排水や資料、見学者の受け入れへの態度をみるとチッソとしては水俣病は掘り返されたくない過去といった考えを持っているのではという感覚があった。このような状態では患者側との溝はまだまだ埋まらないと思い、チッソは水俣病に対してもっと真摯な態度で臨む必要があるのでは？と感じた。

(まとめ：関口)

7) ある生徒の感想から

8月の下旬に水俣を訪れた。正直に言って、それから色々なことがあったし、時間も結構経っていて、よく覚えていないことも多い、というのが本音ではある。が、それでも、時間がたっても覚えていることこそ、フィールドワークに行き得たものではないか、と思ひ、ここに書かせて頂く。

大野先生は、距離感を感じてほしい。といったようなことを度々おっしゃっていた(もちろん他にも色々なことをおっしゃっていたが)。僕たちは今、交通機関の発達した都会に住んでいるからよくわからないかもしれないが、「水俣」という地方の、言ってしまうと田舎に住んでいた人が、裁判を起こすとはどういう事か。地裁は熊本市にしか無く、水俣と熊本の往来は、当時は1日かかりで、とても大変だったはずだ。と、言われても、羽田から飛行機を使い、リムジンバスに乗り、リレーつばめに乗り、更には九州新幹線を使っておきながら、当時の距離感なんて、、、と思わないこともなかったが、それでも、得られたものは大きいと思う。特に、水俣市内を自転車で移動した時などは、坂は結構あったけど、数十分自転車を漕げば、大概のところには移動できてしまうほどの、言ってしまうと小さな街で、その街を二分するほど大事件が過去にあった、というのは想像を絶した。まあ、正確には、街を二分していた、と思っていたが、実際には加害者(チッソや国)と被害者(患者とその家族)というように、簡単に分けられるような状態ではなく、両者が入り交じっていて、とても二分、と割り切ることのできるような状態ではなかったし、だからこそあそこまでも、実態の解明に時間がかかり、まだ終わっていない、という面もあると思う。また、加害者も、原因企業のチッソだけでは決して無く、当時の高度経済成長により、利便性を享受した人々、つまり、日本国民全員、いや、他の国の人々も含め、加害者となったのは、そういった、水俣の人達を含めて、より豊かな生活や便利な生活を求め、手にした人々全員であり、そして、それは当時の人々に限らず、過去の積み重ねの上にいる、その次の世代、さらにその次の世代と、今の時代に生きる僕達を含め、決して無関係ではないということが出来るだろう。

また、一部の人に犠牲を強いて、他の人は何らかの利益を得る、という構図は、決して水俣病に限らず、今でも沖縄の米軍基地の問題など、まだまだあることだし、その問題を認識していたとしても、やはり、負

担を一部に押し付けて、自分は関わりたくない、という水俣病の原因となった構図はまだ残っているのだ、ということも最近になってしばしば思い知らされている。

それから、実際に水俣に行ってみて、何よりも思ったのは、僕も含めて、日本人の中で、今の水俣を知っている人はどれくらいいるのだろうか、ということだ。今では、原爆が落とされた、という事実を知らないという人もいるらしいが、そもそも、水俣病の存在を知っているか、そして、そのなかでも、実際に今の水俣を知っている人はどれくらいいるのか。もちろん、僕も、本当に今の水俣を知ることができた、などと思っているわけではないし、今回のフィールドワークで話を聞いた人も、水俣病に取り組んでいたり、患者の中でも、水俣病のことを話してもいいかな、と思うことの出来ている、ある意味では特殊な人であって、患者全員がそのような考えているわけではないし、実際にそうだと思うが、それでも、今では、よく水俣病、と行ってドキュメンタリー番組とかで使われるように、チッソの工場を取り囲んで怒鳴りこんでいる、などというわけではないし、患者の中でも、水俣からチッソが出ていくことを望んでいなくて、それよりも、和解ではないけど、そういった方向での解決を求める人もいて、現実の水俣では、水俣病と言われて、イメージするような光景は、今では全く、とは言い切れないが、それでも殆ど無いということをごまかす人が認識しているのか。僕自身も、実際に水俣に行ってみて、初めてわかりました。今回の水俣フィールドワークは、実際に経験したことだけでなく、様々なことを考えるきっかけとなった、という意味でも非常に実り多いものだったと思う。今回お世話になった方々、本当に、ありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

4 おわりに

以上、今年度の高校2年生ゼミナールの概要と、生徒の感想による水俣実習の記録を載せた。この稿では、実習で訪れたすべての場所について報告できなかったが、実習の状況と生徒が得たものについて知ることはできると思う。

水俣実習は、これまでの広島実習より日程的にも長く、しかも見学や聴き取りで訪れる場所が多く、非常にタイトなスケジュールであった。したがって、実習中はなかなか生徒どうしで意見を交換する場が少な

った。何とか時間をやりくりして、夜の宿舎では反省会を行うことができたが、不十分であった。

また、水俣を初めて訪問する生徒がほとんどだったが、市内を走り回るのはあっても、水俣病に関わる現場を見たのは短く限られた時間だった。やはり、水俣市内全体を俯瞰する場面と水俣病ゆかりの地を訪ねることも必要であった。

今回の実習では、水俣学から入ったが、記録や学問からとらえた水俣病と、当事者（しかもさまざまな立場から）から聞き取った内容が異なることにも生徒は気づいた。社会科学の基礎として、フィールドワークをとらえてほしいという目的から照らし合わせて、よい経験をしたのではないかと思う。

いずれにしても、生徒にさまざまな影響を与えた実習をもとにして、各人がどのように卒業研究を行っていったかについては、いずれ機会をあらためて報告したい。

なお、本実習はSSH事業の一環として行われたことを付記しておく。

参考文献

1. 高峰 武編 (2008) 『水俣病小史』水俣学ブックレットNo.6 熊本日日新聞社
2. 筑波大学附属駒場高校 (2006) 『スーパーサイエンスハイスクール総合講座講演記録集』
3. 栗原 彬 (2000) 『証言 水俣病』岩波新書
4. 宮北隆志 (2010) 『失敗の教訓を活かす』水俣学ブックレットNo.8 熊本日日新聞社
5. 熊本学園大学水俣学研究センター編 (2009) 『水俣を歩き、ミナマタに学ぶ 改訂版』水俣学ブックレットNo.3 熊本日日新聞社